

# 国指定史跡

## 開作を支えた土木技術

# はまごちょうからひ 浜五挺唐樋



財政の基盤が米中心の幕藩体制では、財政立て直しの対策としてどの藩も新田開発による米の増産に取り組み、瀬戸内に面した毛利藩は海面干潟の干拓を奨励しました。毛利藩では新田開発を開作といい、制度上では公儀開作、家来拝領開削、寺社敷開作、百姓自力開削に大別されます。藩直営で行われるものが公儀開作で、そのなかで最大の干拓地が寛文8年(1668)に完成した小野田の高泊開作<sup>たかどまり</sup>です。

この開作は、美祢から小野田に流れる有帆川<sup>ありほ</sup>の河口部となる高泊湾を干拓し、400haの新田を生み出すものでした。この大事業を支えたのが潮止の樋門「浜五挺唐樋<sup>はまごちょうからひ</sup>」で、岩盤を切り抜いて造られたことから切貫唐樋とも言われています。

唐樋とは、潮の干満作用により自然開閉する構造をもった樋門のことで、高泊開作の樋門は当初3挺でしたが、安政4年(1857)に排水効率を高めるために5挺に増設され、幅10.81m、総高6.18mの規模となりました。排水口に設けられている招き戸は、潮の干満で生じる自然の水圧によって開閉する仕組みで、非常時には招き戸をロクロで巻き上げるように設計されています。切石による精緻な樋の構造は、当時の土木技術の高さを示しています。

周防灘で行われた開作の様子を示す国史跡の周防灘干拓遺跡は、高泊浜五挺唐樋と山口市名田島にある名田島新開作南蛮樋です。共に、江戸時代に行われた干拓の遺跡として貴重なものですが、高泊の唐樋は、平成元年隣接地に高千穂樋門が建設されたため、排水路はコンクリートで閉鎖され、また名田島南蛮樋は大正12年(1923)に、その沖合に山口県営干拓が完成したことで、樋門としての使命を終えました。しかし、300年以上にわたってその役目を果たしつづけたことで、ともに平成8年(1996)3月28日に国指定史跡に指定されました。

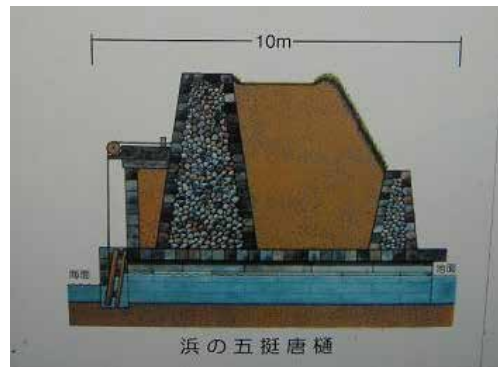


五挺唐樋の北に、黄金に輝く稲穂が続く高泊開作が広がる

### ■位置図



当嶋八幡宮



「浜五挺唐樋」を側面から見た模式図



切石による精緻な樋門。地層がむき出しになった側面は、固い岩盤だったことがよく分かる。